

【研修レポート】生命尊重の道德授業実践と研究協議の総括 —「命を守る授業」の授業構想・生徒の変容・協議論点の体系化—

1. 研修概要および授業実践の背景

1.1 授業実践の基本情報と主題設定の理由

- 実施日時：平成17年(2005年)6月23日(木) 第5校時(14:20～15:10)
- 実施場所：西之表市立榕城中学校 1年1組教室
- 対象生徒：1年1組 計37名(男子16名、女子21名)
- 指導者：教諭 原口 榮一
- 主題名：生命尊重

主題設定の背景と現代社会の状況

『中学校学習指導要領解説-道德編-』には、「人格の形成の基本に関わるもの(p.12)」「道德教育は、『人生いかに生きるべきか』という生き方の問題と言いかえることができる(p.13)」と提示されている。道德の根本には「生きている」という厳然たる事実があり、人がよりよい生き方を選択・実践するために道德を学ぶ。しかし、現代の青少年を取り巻く社会状況および「生死」に関する意識には深刻な課題が観察される。

1. 少年犯罪と事件の状況：神戸や長崎の幼児殺害事件、佐賀バスジャック事件、佐世保少女刺殺事件など、青少年の凶悪事件が連続して発生している。国内の年間殺人件数は大きな変動はないものの年に100件近く発生しており、傷害や強盗事件も増加傾向にある。青少年の非行防止に向け、規範意識や倫理観、他者への思いやりの心を養う指導が強く求められている。
2. 人工妊娠中絶の現状：平成15年度の10代の人工妊娠中絶数は40,475人にのぼり、全人工妊娠中絶数の12.7%を占める。これは10年前(平成5年度)の約1.4倍に相当し、胎児の命が奪われるのみならず、母体への身体的負担や後遺症・不妊、生命の危険を伴う重大な問題となっている。
3. 自殺者数と感性の麻痺：2003年の警察庁発表データによると、日本の年間自殺者数は34,427人に達し、日本人の死因第6位、20代・30代の若年層では死因のトップとなっている。インターネットを介して知り合った者同士が一酸化炭素(CO)中毒死を図るなど、死に対する感性の麻痺や奇異性が社会全体に進行している。
4. 死の実態からの乖離と歴史的風化：核家族化や高齢化に伴い、家庭内で祖父母らの死に直面する機会が減少した。また、戦争体験者等から死の現実を語り継がれる機会も減っている。さらに、テレビゲームにおいて「死んでもリセットすれば生き返る」仮想体験や、メディアで殺戮シーンが消費されることで、現実と仮想世界の境界が曖昧になる問題が指摘される。加えて、世間一般において悲惨な事故や事件が数ヶ月で忘れ去られる一般的な風化現象が存在するだけでなく、**「20年前の日航機墜落事故を覚えている、もしくは教えられているだろうか」**に象徴されるように、歴史的重大事故の教訓が次世代へ継承されていない教育的課題が浮き彫りとなっている。

こうした実態を踏まえ、本実践では過去の事件・事故に触れつつ、単なる抽象的な「命の大切さ」の注入にとどまらない、死の持つ不可逆な現実と「自他の生命を守る」ための具体的判断力・実践意欲を養う道德授業を構想した。

1.2 生徒の生死に関する体験・意識の実態

授業実施に先立ち、対象生徒(1年1組36名および1学年全体144名)および比較対象としての3年生選択道徳履修者(34名)に対して行った「生死体験アンケート」の数値データ、ならびに他校(鹿児島市T中学校)との比較データは以下の通りである。

アンケート項目、1年1組人数(36名中)、学年計人数(144名中)、学年計割合(%),3年生選択人数(34名中)、3年生選択割合(%),鹿児島市T中学校割合(%)

1. 人の死んだ体にさわった,12,38,26%,5,15%,26%
2. 生まれたばかりの赤ちゃんにさわった,7,27,19%,11,32%,34%
3. 人の死んだ顔を見た,32,106,74%,26,76%,61%
4. 親しい人が死んだ,18,68,47%,20,59%,37%
5. 生まれたばかりの赤ちゃんを見た,14,58,40%,15,44%,45%
6. ペットが子どもを産むのを見た,5,22,15%,7,21%,16%
7. ペットが死んだのを見た,18,78,53%,21,62%,50%
8. 人がたくさん死亡した事件・事故と言えば何か(複数回答可),,,,,,
 - JR福知山線脱線事故,24,91,63%,22,65%,-
 - スマトラ沖地震,3,17,12%,3,9%,-
 - 新潟県中越地震,3,14,10%,1,3%,-
 - 阪神大震災,2,10,7%,2,6%,-
 - 地下鉄サリン事故,1,6,4%,1,3%,-
 - 同時多発テロ,2,7,5%,1,3%,-
 - 交通事故,0,4,3%,1,3%,-
 - 原子爆弾,1,2,1%,0,0%,-
 - 第二次世界大戦,0,1,1%,2,6%,-
 - 戦争,1,1,1%,1,3%,-
 - 桜島大爆発,0,0,0%,1,3%,-
 - 富士山大爆発,0,0,0%,1,3%,-

榕城中学校の生徒は、都市部のT中学校と比較して「人の死んだ顔を見た(74%)」「親しい人が死んだ(47%)」の割合が高い。これは同居・近接居住する祖父母や地域コミュニティとの結びつきが強く、身近な老人の死に接する機会が多いためと考えられる。また、学年が上がる(3年生選択)につれて親しい者の死やペットの死の体験割合が増加する発達の視点も確認できる。

「命のイメージ絵」に見られる生徒の傾向

事前指導として描かせた「命のイメージ絵」では、「命＝ハート型」の定型的な図式が多く占めた一方で、ナイフを手にする姿、銃撃場面、首を吊る様子、悪魔の描画など、事件・犯罪や自傷・暴力を直ちに連想させる絵画表現も複数散見され、生徒の感性における危機的な側面が浮き彫りとなった。

1.3 系統的な生命尊重学習(全5時間)における本時の位置づけ

本実践は、生徒が道徳の時間を「ためになる、楽しみだ」と感じられるよう工夫された、全5時間に及ぶ系統的道徳学習の締めくくり(第5時)として構成されている。

- 第1回:「死んだらどうなるか」(紙芝居使用・授業者自作)
- ねらい・内容:死後の世界について「科学上の視点と心の上の視点の2つがある」と整理。天国や生まれ変わりなどの死後観を確かめつつ、今ある命を精いっぱい生きる重要性を捉えさせた。
- 第2回:「夢をかなえる仕事」(動画資料使用・授業者自作)

- ねらい・内容：事故などの困難に直面しても夢を追う事例を通じ、「命がある限り夢をかなえることができる」という価値に気づかせ、命を守り助ける職業や自身の進路選択へ視野を広げさせた。
- 第3回：「死の行進」（漫画使用・授業者自作）
- ねらい・内容：雑誌連載漫画を教材化。集団自殺すると誤解されていたレミングが実は最後まで挑戦を続ける動物であることを知り、「自殺の現状」「手職を持つ意義」「小さな生命の営み」などを多角的に考察した。
- 第4回：「40億年・命の授業」（動画資料使用・深澤久氏の実践を改変追実践）
- ねらい・内容：DVDを活用し、地球上に生命が誕生して40億年継続してきた歴史と神秘性を提示。人間自身が生み出した事件・事故による命の途絶を問い直し、生命の重みを体感させた。
- 第5回（本時・オリジナル授業）：「命を守る」
- 接続理由と意義：第4時までの「生命の歴史的・科学的重さと生命をおびやかす事実」の理解を踏まえ、より身近で現実的な事件・事故場面において「自他の生命を守るためにどう行動するか」を前向きかつ主体的に考えさせる着地点として本時を設定した。

2. 道徳学習指導案「命を守る授業」の構造と教材化の工夫

2.1 本時の目標と指導方針

- 学習指導要領との関連：第3章 道徳「3-(2) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重するようにする。」
- 校訓・道徳教育重点目標との関連：「自然を愛するとともに、自他の生命を尊重する生徒を育成する。」

本時の目標

自他の生命を守るために必要なことを感じとることができる。

指導方針

- 事実を表す資料を示すことで、現実の問題であることを意識させる。
- 傍観者として考えさせるのではなく、自分ならどうするかを意識させる。
- 自分の考えをまとめる時間をとるとともに発言を堂々とするように助言を必要に応じて行う。また、書く作業も取り入れる。
- 理屈で考えさせる場面だけでなく、感性でとらえる場面も設定する。

2.2 自作教材・時事資料の選定と活用法（資料1～資料6）

報道機関のニュース記事や画像を再構成し、現実感を持って生徒に迫る6群の資料群（ワークシートおよび提示用）を準備した。

- 提示資料1：ゲーム画面（①洞窟の画面、②怪物現れた画面、③プレイヤー全滅画面）
- 情報源：インターネットより収集
- 役割・工夫：ゲーム上の「死（リセット可能な仮想世界）」を紙芝居形式で提示。展開部で扱う現実の不可逆な「死」との強烈な対比を生み出す導入教材とした。
- ワーク内容資料2：洞窟事故記事
- 情報源：Yahoo!ニュース・時事通信（2005年4月9日「洞窟で中学生4人死亡、火使いCO中毒・鹿児島市」）
- 役割・工夫：同県内（鹿児島市）で起きた同世代の中学生の死亡事故を提示。「正しい知識(A)」と「危険を予測・回避する想像力(B)」があれば不慮の事故を防げることを理解させる。

- 提示資料3: JR福知山線脱線事故 新聞見出し
- 情報源: 朝日新聞(2005年4月26日「電車脱線52人死亡」「マンションに激突」)
- 役割・工夫: 大規模事故の一面見出しを大判提示し、現場の緊迫感と惨状の規模を一目で把握させる。
- ワーク内容資料4(1): 病院・負傷者の搬送記事
- 情報源: 朝日新聞(2005年4月26日「病院 負傷者次々と」/ ワークシート掲載「尼崎電車脱線事故!! 事故が起きてから1時間経っていない状況です」)
- 役割・工夫: 発生直後の文脈をテキストで提示し、医療機関や現場周辺の混乱と救助の緊急性を客観的に把握させる。
- 提示資料4(2): 現場救助写真(写真のみ)
- 情報源: 毎日新聞(2005年5月1日)
- 役割・工夫: 事故発生直後、レスキュー隊だけでなく私服姿の「普通の人々(市民)」が懸命に負傷者を担架や毛布で運ぶ視覚写真を拡大提示し、感性に直接訴えかける。
- ワーク内容資料5: 市場関係者の救助活動記事と応急手当手順
- 情報源: 毎日新聞(2005年5月18日「もしもの時に: / 上『日ごろ』から何ができるか」)、谷川攻教授(広島大病院高度救命救急センター長)の助言記事
- 役割・工夫: 阪神大震災の経験から水や氷を現場へ運んだ市場社長(安藤氏)の決断を紹介。中学生でも実施可能な「声をかける」「水・氷を渡す」「気道確保」「応援を呼ぶ」等の具体的初期救助を整理させる。
- ワーク内容資料6: PTSD・救助労災記事
- 情報源: asahi.com関西(2005年5月18日「『救助労災』を積極認定の方針 JR脱線事故で厚労省」)
- 役割・工夫: 救助に当たった隣接工場の従業員らがトラウマ(フラッシュバックや不眠等)に苦しむ現実を示し、他者の生命を救う行為の重みと心理的負担を認識させる。

2.3 授業展開の構造(導入・展開・終末と発問構成)

段階,時間,展開の概要・主要発問,予想される生徒の答え,指導上の留意点

導入,5分,1. ゲーム上での「死」を考える。【提示資料1】で仮想の生死を考える。発問1:「さて、こうなったら次はどうしますか。」「リセットする」「オフにする」、展開で出てくる現実の事故との対比となる資料。・生徒に発表させる。・ワーク(以下W)1p・2pを配る。

展開,38分,2. 中学生に関わる最近の事件から、「自分の命を守る」ための方策を考える。【資料2】で事故防止を考えさせる。発問2:「この事故を二度と起こさないために、どんなことを知っていればいいでしょうか。」「不慮の事故(死因第5位、死亡者数約3万人)」について説明。「知識」を持てば防げるものがあることを伝える。・「知識(A) + 想像・推測・予測(B)する力」の二つが必要であることを解説。・「CO中毒しないようにする」「洞窟に入らない」「火を使わない」、・生徒に発表させる。・W2pを開ける。

3. 最近の重大事故から「他人の命を守る(救う)」ためにすべきことを考える。【提示資料3】で簡単に事故の説明をし、【提示資料4(2)]を説明なしで見せ、事故現場から考えさせる。発問3:「気がつくことは何ですか。」「たくさんの方がいる」「普通の人(スーツを着た人等)がいる」「けが人が大勢いる」、・W3pを配る。・生徒に発表させる。

発問4:「なぜ、(普通の方が救助)しているのでしょうか。」「救助隊が間に合わない」「けが人が大勢いるから」「とにかく助けたかったから」、・生徒に発表させる。

4. 市民による救助活動の現実と自分にできることを考える。【資料5】で初期救助の状況を説明。発問5:「このようなとき、あなたでもできそうな簡単な救助には何がありますか。」「【資料5】の続きを見せ、市民にできる応急手当の手順を教える。・【資料6】でPTSD(救助後の悩み)の説明をする。」「水、氷をわたす」「けが人を運ぶ」「大丈夫?と声をかける」「警察に連絡する」、・W4pを配る。・W5・6pを配る。・W6pを開ける。・実際に役立つ知識として提示する。

„5. 自分自身の行動選択と意識の確認。・「命は大切なものです。だれだって死にたくないし、助けられたい。」「簡単な救助でも助かることがある」「一方で救助者も悩んでしまうこともある」を整理。発問6：「さて、あなたなら、もしこういう事故現場にいたら、自分のできることをしたいとしますか。」「したい」が多いと考える。・生徒に挙手させて人数を確認後、理由まで発表させたい。

終末、7分、6. 考えをまとめる。指示：「今日の道德授業の題名と感想を書きなさい。」・（他者の考えを聞き、いろいろな考えがあることを知る。）・時間が許せば、教師の方で生徒の名前を読まずに感想を共有する。（ワークシートに記述）、W1p～6pまでを留めて提出させる。・感想は書きやすいように助言する。・発表できない場合は、後日学級通信でお知らせする。練習問題の解答も付加する。

3. 生徒の学習記録と意識変容・授業評価

3.1 ワークシートの記入状況と生徒の思考プロセス

生徒がワークシート(W1p～6p)に記入した具体的な思考プロセスと記述の実態は以下の通りである。

- 生徒が自らつけた授業の題名(抜粋)：
 - 「救助・自分に出来ること」「人の命・こんなとき自分なら」「命の大切さって?」「救助のために自分が出来ること」「命を助けるとはどういうことか」「命は大切・事故が起きると・死にたくて死んだんじゃない」「私たちにもできること」「こんなとき・死・相手の命を考える」「金より命」「相手の立場になって・みんなの協力!!」
- 洞窟CO中毒事故を防ぐ方法(発問2への記述)：
 - 「洞窟で火を使ったら危ないと知っていればいいと思う」「ふざけて洞窟などに入らない」「一酸化炭素が出るとことを知っていれば良かった」「明かりは懐中電灯を使う」「空気のコモる所で火を使ってはいけない」
- 事故現場写真【資料4(1)・(2)】を見て気づいたこと(発問3への記述)：
 - 「イスみたいなものがある」「急いでいる」「倒れている人がいる」「スーツを着ている人などが助けている」「あわただしい雰囲気」「みんなケガをしている人を一生懸命運んでいる」「助けている人が町の人たち」
- なぜ普通の人(市民)が救助を行っているか(発問4への記述)：
 - 「救助する人たちが少なくて、ケガをしている人がいっぱいいるから」「とにかくケガをしている人を助けたかったから」「急に起こったことだから」「ケガをしている人がいるのに、見ていだけではいけないと思ったから」「まだレスキュー隊などが来ていなかったから」「大きな事故でパトカーや救急車がくるのに時間がかかるから」「中に肉親がいるから」
- 自分にできる簡単な救助方法(発問5への記述)：
 - 「『大丈夫?』と呼びかける」「小さな子たちに優しく声をかける」「かすり傷など自分の持っている物で簡単な治療をする」「警察に連絡する」「周りの人たちに助けを求める」「水や氷を渡してあげる」「大人の指示に従う」「楽にしてあげ(大人の手伝いをする)」
- ※この「楽にしてあげ(大人の手伝いをする)」という記述は、後に研究協議で論点となる生徒の発言表現の多義性を解明する重要な根拠となっている。

3.2 自他の生命を助けたいかの意識選択(発問6の集計と理由)

発問6「もしこういう事故現場にいたら、自分のできることをしたいと思うか」に対する挙手・記入集計、およびその選択理由は以下の通りである。

- 「したい」：36名
- 「したくない」：1名

生徒が記述した選択理由(原文引用)

【「したい」と回答した生徒の理由】

- 自分よりもケガをした人の方がつらい目にあっているし、少しのことで人の命が救えるのならば、救助したい。
- 将来の夢は看護師だし、命は一人に一つしかないものだから。
- 自分の命も大切なんだから、他人の命だって同じくらい大切なんだから自分にできることは、出来る限りやって人の命を助けたい。
- 何もしないでいるより、命を助けることを優先する。何もしなくて死んでしまったら自分のせいだと思うかもしれない。
- タオルとか持っていたら、それをわたす。
- 近所の人たちと協力して必要なものを使う。
- 自分の命じゃなくても他人の命も大事だし、現場にいるのに無視していくのも自分もいやだからです。
- もし、これが自分の立場だったら助けてほしいと思うから。
- 自分の手で、人の命が助かるのであれば、少しでも役立ちたい。
- もっと後悔するかもしれないから。
- もし、命を取り戻したらうれしいし、その助かった人たちは持つとうれしがるから、したいと思いました。
- たくさんの方が大けがをしているのに、見て見ぬふりは出来ない。
- 一人でも人が多くいれば、一人でも多くの命が助けられるから。

【「したくない」と回答した生徒の理由】

- 助からなかったらいやだから。

3.3 授業評価アンケートと生徒の日記・感想に見る変容

授業評価アンケート結果(対象:37名)

評価項目,1(最低),2,3,4,5(最高),平均値

楽しさ度,0,1,3,8,25,4.54

ためになった度,0,0,0,0,37,5.00

「ためになった度」においては、受講した生徒37名全員が最高評価である「5」と回答した。

生徒の日記・感想に見られる質の高い意識変容

- 授業構成・演出に対するリアルな観察：
- 「今日のGTは、脱線事故のことや中学生の一酸化炭素のことで ゲームはリセットができるけれど、人生はリセットできないことを学びました。」
- 「ゲームの話から始まって、音つきでわかりやすくなっていました。今日は事故などがあつたときに自分ならどうするかを考えました。」
- 「原口先生も緊張していたらしく、汗をだらだら書いていました。でも授業を受けてみて、いつもの原口先生だったので普段どおり楽しくてためになる授業でした。」
- 「原口先生の授業を5回ぐらいしたけど、今回やったことが一番タメになったと思う。人がケガをしたらどうやって助けたらよいのかも分かった。」
- 「たてまえ」を超えた葛藤と主体的意志：
- 「ボクは、最後の救助をしたい、したくないの選択で『したい』の方を選びました。『もし、死んでしまったら...』と思ってしないのは、『もしかしたら助けられたかも...』というこうかいに悩まされるかもしれないと思ったからです。ボクは、もしその立場になったら、目をそむけず、あとで後悔することがないような、自分に正直になって行動していきたいと思います。」

- 「ぼくは、事故現場を見て素通りして、その後『ああ、なんであのとき自分は救助をしなかったのだろう。』と思うよりは、救助をして、その後の光景を思い出しても『自分は正しい事をしたんだ』と思える方が良い。」
- 「自分もこういう立場になったら、絶対に『助けよう』と思うだろうけれど、実際、他人の命を救うことはできるのかと不安になると思う。こういう立場に立って救助活動できた人たちは、すごいと思った。」
- 「もしも、この種子島で、自分のすぐ目の前でこんな事故が起こったら正直怖くてなにもできないかもしれないけど、優しく声をかけたり、自分が探せる簡単なことをするだけでたくさんの方が助かるかもしれない。今日は自分の気持ちに正直になれる授業だったと思う。」

4. 研究協議・参観教師(A氏～G氏)の評価と議論の体系化

4.1 参観教師(A氏～G氏)による全体評価の概要

参観者,主な評価・意見

A氏,「不慮の事故」の定義に関する概念的指摘。発問6の前にPTSD資料等を深く扱い、オープンエンドで葛藤を生む展開の提案。生徒の発言への対応やワークシート多用への問題提起。

B氏,前任校での登山事故体験(教諭の遭難・死)に触れつつ、現場で救助できなかった者の心の痛みに共感。PTSDを扱う資料6の提示工夫を高く評価。

C氏,時事事件・事故の巧みな資料化とテンポの良さを評価。生徒が集中・発言しやすい雰囲気づくりを認めつつ、価値観のぶつかり合いや深まりへの期待を表明。

D氏,教室の雰囲気が明るく師弟関係が良好。自作資料や音響効果等の準備の充実に感銘。副読本活用に関する質問を提示。

E氏,授業者の人柄と道徳教育への情熱を高く評価。理解していても実行できない弱い心や価値葛藤に迫る指導の必要性を指摘。

F氏,導入の工夫とリラックスした授業展開を評価。不規則発言(そぐわない発言)の受け止めと雰囲気づくり、資料作成の労をねぎらう。

G氏,豊富な資料準備と、生徒が毎時間道徳を楽しみにしている様子に感心。授業者の受容的な指導姿勢を絶賛。

4.2 核心的論点1:不慮の事故の定義と葛藤場面(オープンエンド)の深め方

A氏の質問・指摘

1. 概念整理:洞窟CO中毒事故は「不慮の事故」なのか、「不幸な事故」なのか。「不慮」とは本人に全く落ち度がない場合を指すのではないか。
2. オープンエンド手法と道徳的葛藤の深め方:発問6の前に、PTSDや救助者の深い葛藤(吉野千春氏の事例)に迫る資料を提示し、オープンエンドで徹底的に討論させるべきではなかったか。ゆさぶりが不足したため全員が「したい」に流れたのではないか。

吉野千春氏の事例(授業者構想「第二案」の提示資料概要)

毎日新聞2005年5月24日大阪夕刊記事「生きているなら無事喜びたい —吉野千春さん」福知山線脱線事故の際、踏切で事故に遭遇した吉野氏(43)は、血まみれの負傷女性に寄り添い血をぬぐい「頑張って」と励まし続けた。しかし事故後、病院を訪ねても個人情報保護で安否が分からず、「もっと多くの人を救えたのでは」「亡くなった人に申し訳ない」と強い罪恶感とトラウマに苦しみ、夜も眠れず献花台へ20回以上通い詰める事態となった。

授業者(原口氏)の回答・見解

- 言葉の定義：岩波国語辞典第6版に基づき、「不慮の事故＝思いがけず人に降りかかる(不幸な)こと」と解釈して授業を展開した。
- 第二案(オープンエンド案)を断念した理由：
- 当初の「第二案」では吉野氏の手記等の重厚な長文資料を用い、救助後に深い葛藤とPTSDに苦しむ現実に迫り、「したい/したくない」で全学級を2分する討論(オープンエンド)を構想していた。
- しかし、**「中学1年生の発達段階を考慮し、今回はまず『人を守る意欲・やる気』を引き出すことを優先した」こと、および「50分という時間枠内で長文資料の読解と対立討論を完了させることは困難である」**と判断し、簡易な資料提示へ変更した。
- 結果として「したい」を選んだ生徒たちも、ワークシート記述に見られるように「助からなかったらどうしようという不安」「素通りした後の後悔」など、独自の深い価値葛藤と自己分析に到達している。

4.3 核心的論点2: 生徒の発言への対応とワークシート活用の是非

論点1: 生徒の不規則発言(「楽にしてやりたい」)の受け止め

- A氏の指摘：授業中、生徒から「楽にしてやりたい」という発言があった。これは単なる悪ふざけか、あるいは癌等の難病で苦しむ近親者を持つ生徒の切実な本音(安楽・苦痛緩和の文脈)だったのではないか。少数意見の真意を慎重に見極めるべきである。
- 授業者(原口氏)の回答：前後の文脈や態度(周囲に聞こえるように「楽にするってどういう意味か分かるか」とニヤニヤしながら話しかけていた等)の観察から、本件は明確に冗談まじりの発言と判断した。生命尊重を扱う道徳授業において、悪質な冗談は基本として戒める必要がある。ただし、「もしあなたが苦痛を和らげる意味で言ったのなら…」と受け止めつつ、全体へ反論を促すような昇華のさせ方も検討の余地があった。
- 補足的考察：Section 3.1に示した通り、ワークシートの記述内には「楽にしてあげ(大人の手伝いをする)」という正当な救助協力の文脈での言葉選びも存在していた。生徒の言葉遣いの多義性・多面性を教師側がいかに見極めるかという指導技術上の課題が浮き彫りとなった。

論点2: ワークシートを多用する授業形態の評価

1. 参観者の懸念：毎時間多量のワークシート記入に時間を奪われ、対話や議論が疎かになるのではないかと懸念。
2. 授業者(原口氏)の見解：ワークシート活用には明確な教育的意義がある。
3. 思考の集約と発言保障：まず「書く」プロセスを経ることで自身の考えが構造化され、発言が苦手な生徒も堂々と自身の意見を表明できるようになる。
4. 思考の軌跡の保存：記述が紙面として残るため、後から生徒自身が過去の自分と比較し、考えの変容や軌跡を自己分析・振り返りできる。
5. 授業分析ツール：回収したワークシートを全件点検・分析することで、授業者自身の指導法の反省や生徒の道徳性変容の客観的検証に直結する。

5. まとめと今後の道德教育への示唆

5.1 「たてまえ」を超えた道德的価値の深まりと課題

「たてまえ」の定義（香道研編集『道德基本用語集7』より）

「世間一般の人々が常識として考えること、または、原則である。本音と相反する言葉として用いられる。心の中では『...したくない。』と思いながらも、それを口に出してはいいにくく、思いとは逆に『...するべきだ。』と言ってしまう。このような『たてまえ』が先行し、『たてまえ』で学習が終始してしまつては、道德的価値を深化させることはできない。また、実践化を図ることも不可能である。」

本実践および協議から得られた教育学的示唆

1. 「生の事実」が引き出す主体的本音：抽象的な説教や綺麗事の道德観ではなく、洞窟事故やJR脱線事故、PTSDといった「生の現実資料」を提示したことで、生徒は「命は大切だから助けるべきだ」という表面的な「たてまえ」を突破した。「助けたいが実際は恐怖で動けないかもしれない」「後悔したくないから声かけから始める」といった、自己の弱さや葛藤を受け入れた上での主体的な本音を引き出すことに成功した。
2. 葛藤場面の設定と段階的指導の必要性：今後の課題として、生徒の道德的実践力をさらに高めるためには、授業者構想の「第二案」にあるような心理的負担や価値の対立（オープンエンド）をどこまで提示するかの見極めが挙げられる。発達段階や時間の制約を考慮しつつ、本音で議論を戦わせる場面を意図的に組み込むことが道德的価値の深化につながる。

5.2 研修レポートの結び（教員研修としての還元）

本授業実践は、現代青少年の生命軽視や死の現実感の希薄化という深刻な社会課題に対し、新聞記事や時事データ、マルチメディア（音響・画像）を駆使した「命を守る」具体的・系統的な指導プランを提示した点において、極めて高い実践的価値を有している。全5時間の学習を通じ、生徒全員が「ためになった（5.00）」と評価し、仮想世界の死（リセット）と現実の死の不可逆性を明確に識別した変容は、道德授業の可能性を力強く証明している。

また、研究協議において参観教師陣から出された「不慮の事故の概念整理」「オープンエンドによる葛藤の深め方」「不規則発言の捉え方」「ワークシートの機能」等の多角的な批評は、一回の授業実践を研究材料として批評し合い、指導法を研ぎ澄ます上で不可欠な営みである。教員研修として本レポートの成果を還元し、全国の道德実践において「たてまえ」を超え、生徒が自他の生命の尊厳と誠心誠意向き合う道德授業が一層展開されることを期待する。